

## 単語隣接ネットワークによる『相続者たち』の著者推定

—文学分析のための定量分析と伝統的文学批評の融合—

筒井 遥

**Abstract** The collaborative works of Conrad and Ford, though individually less renowned, hold significant importance as they offer unique insights into the interactions and experimental efforts of two distinguished 20th-century English novelists. *The Inheritors* (1901), their initial joint endeavor, is generally believed to be primarily authored by Ford, with Conrad contributing “a final tap” to each scene. However, the lack of explicit delineation of their individual contributions poses challenges to conducting a comprehensive critical analysis of the work.

This study addresses these challenges by employing digital humanities tools and methodologies, with the goal of establishing a concrete framework for literary textual analysis. In response to the quantitative and technical challenges highlighted by prior research, notably by Rybicki et al. and Eder, this study adopts the Word Adjacency Network (WAN) methodology. This approach analyzes the patterns of word adjacency within a text, offering a nuanced examination of its linguistic structure.

Our analysis identified significant similarities between passages in *The Inheritors* and those in “Heart of Darkness,” *Lord Jim*, *The Arrow of Gold*, and *The Marsden Case*, respectively. By comparing sections of 1500 words from each text, our findings reinforce previous research and corroborate insights from manual or traditional critical readings. Additionally, this study enhances our understanding by combining manual reading with digital analysis, particularly in examining the self-deceptive nature of the young narrator in *The Inheritors*.

コンラッドとフォードの共著作品は、リビツキ他 (Jan Rybicki et al. (2014)) 及びイーダー (Maciej Eder (2016)) らによって著者推定調査が行われてきた。まずリビツキ他は特定の単語の登場頻度に注目する統計的手法であるローリングデルタ (Rolling Delta)<sup>1</sup> を用いて共著三作品の文体調査を行い、概ね批評家のコンセンサスを確認する結果を発表した。すなわち、『相続者たち』と『犯罪の本質』では、フォードの文体と推定される箇所が圧倒的の大部分を占めており、反対に『ロマンス』においてはコンラッドの文体がフォードよりも優勢となる、というものである。<sup>2</sup> しかし2年後に同様のローリング方式で三作品を再検証したイーダーの実験では、異なる条件下で再現性が確認されず、コンラッドとフォードの執筆箇所を特定することの困難さが浮き彫りとなった。イーダーによれば、このような“ambiguous outcome”には両作家の共同作業の特徴が反映されている(467)。<sup>3</sup> つまりこれらの共著作品の中には、調査者が予め想定していたであろう一定量の個人執筆箇所 (例えば1章から5章まではフォード/コンラッドである、など) があるわけではなく、アイデアからプロット、言葉選びに至るまでの全過程を通じて二人の執筆関係が緊密であるため、両者の文体の境界線が“ambiguous”なものとなっているのである。<sup>4</sup> 実際にフォードはコンラッドの回想録の中で、『相続者たち』のそれぞれの担当箇所を次のように区別して明かしている (イタリックの部分はコンラッド、ローマ字の部分はフォードが執筆した箇所とされる)。

I came out of my moodiness to wonder what type this was. *She had good hair, good eyes, and some charm.* Yes. And something besides—a something—a something *that was not an attribute of her beauty.* The modelling of her face was so perfect as to produce an effect of transparency, *yet there was no suggestion of frailness; her glance had an extraordinary strength of life.* (Ford 147)

フォードの主張が正しければ、本作では文単位、あるいは節単位で作者の交代が行われている可能性があり、ローリング方式では捉えきれないほど頻繁な著者交代が起きているというイーダーの見解には妥当性がある。

他方、イーダーが示した限界は、調査の手法と共著テキストの双方に内

在する量的な制限によるものである。言い換えれば、異なる方法論を選択することで技術的な制約をカバーし、著者交代が頻繁ではないと想定される箇所には焦点を当てて再検討する方法は依然として残されている。先行研究が採用したローリング方式においては、著者帰属に使用するテキストサンプルの長さは最小でも約 5,000 語であることが示されている (Eder 2015; 180)。というのも、ローリング方式ではある単語が 5,000 語の中でどれくらいの頻度 (確率) で出現するかを計算することで分類精度を保証しており、テキストのサンプルサイズが小さくなればなるほど測定頻度にばらつきが生じ、その結果、データの一貫性が低下してしまうためである。<sup>5</sup> このような量的制約のあるローリング方式に対して、単語隣接ネットワーク (Word Adjacency Network (WAN)) は特定の単語群の出現パターンに注目することでサンプル語数の縮小化に成功している。WAN は 2015 年に初めて導入され、近世劇全般、特にシェイクスピアの戯曲に適用されてきたもので、単に単語の使用頻度だけでなく、単語同士がどのようなパターンで組み合わせられているかという、「隣接パターン」を捉える点に利点がある。機能語などの一般的な単語の配置方法を測定することにより、頻度のみのアプローチでは約 80% の精度であったものが、WAN アプローチでは約 90 ~ 94% の精度が確認されている (Egan 2023)。テキストサイズが小さくなると分類精度も低下することは WAN においても同様であるが、分類対象 (作者) が二名の場合においては、約 1,500 語 (戯曲の約 1 場分) までのサイズで同等の分類精度を達成している (Segarra et al. 2016)。さらにフォードは、『相続者たち』の 17 章後半部 (1,000 語程度) に関してはコンラッドが執筆した箇所であると主張しており (Ford 142)、このような一定量の個人執筆が見込まれる箇所を複数の条件下で調査することで先行研究の裏付けあるいは再考を促すことができるだろう。

このパイロット研究では、コンラッドとフォードの共著作品である『相続者たち』を対象に、WAN を適用した著者推定実験を行う。具体的には 2016 年のシガーラ他 (Santiago Segarra et al.) の手法に倣い『相続者たち』のテキストを両著者の作品データから抽出した文体コーパスと照合する。その際、2023 年にイーガン (Gabriel Egan) が公開した Python 3 向けプログラムコード<sup>6</sup> を使用する。各著者の作品と『相続者たち』との間で一対一の照合

を行い、全作品を類似度の高い順に一覧化する。さらに詳細な分析を行うために、いくつかの作品（ここでは、『相続者たち』と類似性が高く、また執筆時期に近い作品）を選定し、該当するテキストを約 1,500 語毎のセクションに分割する。これらのセクションを全て照合することにより、『相続者たち』の特定の一節が、他の作品の特定の一節とどの程度近接しているかを明らかにするマイクロレベルの分析を実施する。

## 方法論・結果

WAN アプローチは、「作家が文章を書く際には、どの単語をどこに配置するかという選択の際に、少なからず固有の癖や好みが反映されている」(Segarra et al. 241)という前提に立っており、そのような作者固有の癖や傾向（プロフィールデータと呼ぶ）を数学的なモデルを用いて多次元的なネットワークで表現していく手法である。<sup>7</sup> 具体的には以下の手順で調査を行った。

- (1) 『相続者たち』とコンラッドの全作品（29 作品）、フォードの 33 作品それぞれのテキスト（付録 1 参照）のプロフィールデータを作成する。シガーラ他の手法に倣い、両作家の作品コーパスの中で共通して最も登場回数が多い単語を上位 70 個<sup>8</sup>（機能語や代名詞が多数を占める。付録 2 参照）取り出し、その 70 単語がそれぞれのテキストの中でどのようなパターンで配置されているかを数値化する。『相続者たち』のプロフィールデータを可視化すると図 1 のようになる。like と a や、by と their など、連語で使用されやすい語同士は太く、反対に連続して使用されづらい語同士は細い線で表示されていることが分かる。
- (2) (1)のデータを照合し、各作品プロフィール同士の相対的エントロピー (relative entropy)<sup>9</sup> の数値を比較する。図 2 は全作品を『相続者たち』との類似度が高い順（＝相対的エントロピーの値が低い順）に並べて表示したものである。
- (3) (2)の結果を踏まえ、より詳細な分析にかける作品を選定する。『相続者たち』は 1899 年の夏ごろに執筆が始まり(Hawthorn xlix)、1901 年に出版されたとされるが、図 2 では執筆時期が 15 年から 20 年程度離れた

*The Arrow of Gold* (1919)や *Chance* (1914)、*The Marsden Case* (1923)が上位を占め、最も執筆時期に近い作品である“*Heart of Darkness*”(1899)や *Lord Jim* (1900)、*The Cinque Ports* (1900)はそれぞれ上から 22 位、23 位、61 位<sup>10</sup> という結果となった。類似性の高さ、執筆時期の近さそれぞれの要素を考慮し、ここでは『黄金の矢』、『マースデン事件』、『闇の奥』そして『ロード・ジム』の 4 作を選定した。

- (4)上記 4 作品のテキストをそれぞれ 1,500 語ごとに分割し、全てのセクションのプロフィールを作成する。図 3 は『相続者たち』の計 42 セクションと『ロード・ジム』の計 88 セクションのプロフィールをすべての可能な組み合わせ(合計 3,696 通り)で照合した上で、相対的エントロピーの値が低いものから順に 100 セクションを抜き出したデータを散布図に示したものである。図 4 は『相続者たち』の 42 セクションと『闇の奥』の計 25 セクションのプロフィールを照合し(合計 1,050 通り)、同様の手順で上位 100 個抜き出した散布図である。同様に、図 5 と図 6 はそれぞれ『黄金の矢』(72 セクション)と『マースデン事件』(69 セクション)の照合結果である。

## 考察

まずコンラッド作品の特定箇所注目する。図 3 から図 5 では、『闇の奥』の冒頭 (`darkness_section_1`)、そして『ロード・ジム』の第 4 セクション (`jim_section_4`)、『黄金の矢』の第 5、32、63 セクションにおいて顕著な類似性が示されている。次にフォード作品(『マースデン事件』)では、図 6 にある通り、横方向に目立った類似性は示されなかった。最後に『相続者たち』の特定箇所注目する。コンラッド 3 作品(図 3 から図 5)を通じて、第 25、33 セクションとの類似性が示され、図 6 のフォード作品では、第 8、19 セクションに顕著な類似性が示された。

この分析結果から、『相続者たち』において、どのセクションがどの著者によって執筆されたかという点については、第 8 セクション(4 章中盤の“*Oh, you'll find him all right,' Fox reassured;*”から“*so they've got to begin all over again.*”まで)、19 セクション(9 章終盤の“*I have been asked to go upon a mission,*”から“*looked at me, and pointed toward the unmoving door.*”まで)がフォードによる執筆である可能性が高く、第 25 セクション(12 章序盤の“*I was at the Hôtel de Luynes*”から“*It will save you a good deal of pain.*”まで)、

33 セクション (19 章序盤の“The land steward, at the end of a tour amongst cottages”から““And there’s hundreds of Slingsbys all over the country.””まで) はコンラッドによるものである可能性が高いという結論が導かれる。ただし、前述の通り 1,500 語毎のセクションでは捉えきれないほどの頻繁な著者交代が起こっている可能性は依然として残るため、この結果のみに基づいて執筆者を断定することはできない。以下では、既存の質的・量的研究成果やコーパス調査に基づき複数の条件を満たすセクションに焦点を当て、その潜在的な文学的意義を掘り下げる。これは、なぜ特定のセクションの著者推定が必要であるのかという問いに対する応答であり、その現代的な解釈を通じて、量的調査のさらなる発展を導くものである。

まず WAN の実験結果の確からしさ、つまり by や the などの機能語の使用分布によって作家の文体特徴を計測した調査が、実際に人間の目で見てもその作家らしい特徴を捉えているかという点を確認する。コンラッドとの類似性が指摘された『相続者たち』の section\_25 を見てみよう。本作は語り手でもある作家志望の青年グレンジャー (Arthur Etchingham Granger) と四次元から来たと主張する女性との出会いから物語がはじまる。当初この女性の現実離れした話を信じていなかったグレンジャーだが、彼女が主要国の政治の中核に入り込み陰謀を企てていることを知り、自分の考えに疑念を抱きはじめる。

I [Granger] don’t know whether there really was a hesitation in her voice, or whether I read that into it. She stood there, playing with the knots of the window-cords and speaking in a low monotone. The whole thing, the sad twilight of the place, her tone of voice, seemed tinged with unavailing regret. I had almost forgotten the Dimensionist story, and I had never believed in it. But now, for the first time I began to have my doubts. I was certain that she had been plotting something with one of the Duc de Mersch’s lieutenants. (93)

実際の彼女の心情はどうであれ、少なくともグレンジャーには陰謀を告白する彼女の姿が “unavailing regret” に包まれているように感じる。この “unavailing” という表現を今回使用した作家コーパスで検索すると、フォードは 33 作品 (約 250 万語) 中、*Mr. Apollo* (1908) で一回使用しているのみであるのに対し、コンラッドは全コーパス (207 万語) 中 5 回、そのうち 4 回は regret と共起して使用している (*An Outcast of the Islands* (1896) で 2 回、“Karain” (1898)、*Chance* (1914)、*Notes on Life and Letters* (1921) で各 1 回ず

つ使用)。執筆活動の初期から後期を通じてコンラッドが好んで使用している語句であると判断できるだろう。機能語などの *unsubstantial* な単語のみを用いた実験であるにもかかわらず、このような「コンラッドらしい」複雑な心情表現が識別されたことは、WAN の結果の信頼性を高めるものである。

以上を踏まえ、テキストの内容についての詳細な読解分析の可能性を探る。下記引用部は『相続者たち』の *section\_39* に含まれ、図 3 から 5 を通じて、顕著ではないが一定の類似性が示されている。<sup>11</sup> 一方でこの箇所は著者推定実験の対象となる以前より、批評家たちの手によって「コンラッドらしさ」を見出されてきた箇所でもある。

I [Granger] took up the proof and began to read, slanting the page to the fall of the light. It was a phrenetic indictment, but under the paltry rhetoric of the man there was genuine indignation and pain. There were revolting details of cruelty to the miserable, helpless, and defenceless; there were greed, and self-seeking, stripped naked; but more revolting to see without a mask was that falsehood which had been hiding under the words that for ages had spurred men to noble deeds, to self-sacrifice, to heroism. What was appalling was the sudden perception that all the traditional ideals of honour, glory, conscience, had been committed to the upholding of a gigantic and atrocious fraud. The falsehood had spread stealthily, had eaten into the very heart of creeds and convictions that we lean upon on our passage between the past and the future. The old order of things had to live or perish with a lie. (139)

引用部はドゥメルシュ公爵によるグリーンランド植民地化計画の欺瞞を暴露する記事を読むグレンジャーの場面である。それぞれ公爵はレオポルド二世、グリーンランドはコンゴがモデルとなっており、同様の舞台設定を用いた「闇の奥」との関連性がしばしば指摘されてきた。パリー (Benita Parry) はこの箇所を“a passage to which he certainly contributed even if the cadences are not characteristically his” (11) であると指摘し、ブランドリンガー (Patrick Brantlinger) はアチェベによる「闇の奥」批判に応答する中で、この一節がコンラッドの“abhorrence of King Leopold’s rape of the Congo” (258) を如実に示すものとして挙げている。コンラッドの植民地政策に対す

る姿勢を巡る議論は、「闇の奥」というテキストの枠内で展開され続ける限り一定の限界に直面する。しかしながら、コンラッドのアフリカに関する物語のコーパスが拡充されることにより、従来の解釈とは異なる新しい解釈が生み出される可能性がある。こうした観点からも、『相続者たち』の一節がコンラッドのものなのかフォードのものなのかという問題はコンラッド批評にとって重要な意味を持つ。とりわけ、コンラッドの16歳年下の若手作家であったフォードがブラックウッズ・マガジンで連載されていた「闇の奥」を読み、彼に心酔した結果 (Najder 260-1)、コンラッド的な言葉遣いや題材を模倣したのではないか (Knowles & Moore 173)と推測されている現状を踏まえれば、客観的なデータ調査の結果はより大きなインパクトを持つだろう。

他方で、『相続者たち』が植民地政策に対して取っている態度は、「闇の奥」よりもさらに両義的なものであるかもしれない。<sup>12</sup> 前述の引用部に続く箇所ではグレンジャーは植民地政策の欺瞞の告発記事を公にするか否かの決断を迫られ、最終的に彼は自らのジャーナリストとしての堅実な地位を捨ててまで公表することを選ぶ。ハンブソン (Robert Hampson) が指摘するように、このときグレンジャーが直面した選択 (“The old order of things had to live or perish with a lie” (139)) は、マーロウがクルツの婚約者に直面した際に迫られた選択と同様のものであり、その上でグレンジャーがマーロウとは異なる選択をした点は興味深い (68)。マーロウはクルツの婚約者に嘘を吐いたことで欺瞞とともに生きる (to live with a lie) 選択をし、グレンジャーは自分の立場を犠牲にして欺瞞の道を断つ (to perish with a lie) ことを選択したのである。グレンジャーは、マーロウがクルツに忠誠を誓ったように四次元の住人である“she”に忠誠を誓い、そしてマーロウが選ぶことのできなかつた真実の道を選択したはずであるが、最終的に彼女自身の言葉で自らに虚偽があったことを告げられる (“you [Granger] were false to your standards at a supreme moment” (158))。ここでは、前述の二つの選択肢—欺瞞とともに生きるか、欺瞞とともに滅びるかという選択、あるいは、トーリー的保守主義対個人主義の対立構造—それ自体に根本的な欠陥があったことが示唆される。彼女と結婚する夢も破れ、ジャーナリストとしての活躍の道も断たれたグレンジャーは、自分が誤った認識のもとに誤った



判断を下したことに気が付き、自分自身が、「過去と来るべきものの中にある底なしの裂け目にいる幽霊のような、か細く、肉体のないもの」(“a tenuous, bodiless thing, like a ghost in a bottomless cleft between the past and the to come” (157)) であるかのような感覚を抱く。

語り手が知らず知らずのうちに虚偽を犯していたと告白することは、物語自体の信頼性を損ね、読者の没入感を妨げるものともなりかねない。1901年7月10日に掲載されたマンチェスター・ガーディアン紙の『相続者たち』評には、次のような示唆的な記述がある。「これは新しいタイプのゴーストストーリーであり、下品なスリルを排除した、奇妙な質の精神的障害 (a strange quality of mental disturbance) が描かれている(David Seed 157)」。一方コンラッドは、同年8月24日ニューヨーク・タイムズ紙上<sup>13</sup>で、作家の仕事は明確な結論を告げるのではなく、対立物同士の奇妙な同盟関係を認めることにあるとすることで、物語の両義性を擁護している。

Egoism, which is the moving force of the world, and altruism, which is its morality, these two contradictory instincts of which one is so plain and the other so mysterious cannot serve us unless in *the incomprehensible alliance of their irreconcilable antagonism*. . . The only legitimate basis of creative work lies in the courageous recognition of all the irreconcilable antagonisms that make our life so enigmatic, so burdensome, so fascinating, so dangerous—so full of hope. (Seed 164 強調引用者)

四次元に住む「彼女」は告発記事の公表によってドゥメルシュ公爵が支えていた古い政治体制の基盤を崩すことに成功し、物語は彼女たち四次元の住人が三次元の人間たちに代わって地球の遺産を「相続」していくであろうと推測されるところで幕を閉じる。人間よりも明晰で、極めて現実的であるとされる四次元の住人たちは、理想も偏見も後悔も持たない代わりに、「芸術に対する感情も、生命に対する畏敬の念も欠如しており、いかなる倫理的伝統からも自由である」(10)。エゴイズムそのものを体現する彼女たちは、地球を相続するという目的に向かう“the moving force of the world”となる。グレンジャーもまた、作家としての立身出世や「彼女」に対する恋愛感情という複数の対立するエゴイズムの中で苦悩するが、同時に四次

元の住人たちが捨て去った道徳的なものに捕らわれ続けている。

エゴイズムと利他主義の「不可解」(“incomprehensible”)な同居は、グレンジャーが植民地問題という道徳的な判断を求められる機会に直面した際にもっとも顕著にあらわれる。二つ前の引用部にあるように、彼は告発文の書き手が抱いている“genuine indignation and pain”を正確に読み取りつつも、人道的な観点から憤りを感じているわけではない。彼は原住民の虐殺という事件そのものよりも、残虐な植民活動を博愛主義的な慈善活動として吹聴する、そのグロテスクな“falsehood”に愕然としているのである (“What was appalling was the sudden perception that all the traditional ideals of honour, glory, conscience, had been committed to the upholding of a gigantic and atrocious fraud” (139))。ここでグレンジャーの認識は一次的なものから二次的なものへと移行している。つまり、根源的な問題を直視する道を迂回し、その副産物である虚飾の問題のほうへと焦点を調整したのである。後に彼が「英雄的」な行動、すなわち自分自身を犠牲にして偽りに満ちた理想主義を一掃しようとする試み (to perish with a lie) を実行する際にも、この宙づり状態の道徳的問題は未解決のままであり、先に述べた通り、物語の最終段階においてその決意の中に欺瞞が含まれていたことを「彼女」に見抜かれる。これは真の道徳的志向をもったものが成功し、そうでないものが失敗するという単純な道徳基準の適用とみなすべきではないだろう。むしろ、利他的行為と自己中心的行為が混在する状況は、悪意ある残酷さのみに起因するのではなく、無意識のうちの自己欺瞞から生じていることが示されている。

ブラントリンガーが指摘したように、コンラッドにとって帝国主義の最悪の特徴は暴力ではなく「その血なまぐさい痕跡を隠すための嘘のプロパガンダ」 (“the lying propaganda used to cover its bloody tracks”(259)) であつたのかもしれない。これはいかにも虚飾を嫌うコンラッドらしい帰結である。しかしその一方で忘れてはならないのが、虚飾を殊更に強調し糾弾する人間が陥っている視野狭窄の問題である。『相続者たち』におけるグレンジャーの悲惨な結末は、コンラッドがこの問題に自己批判的な仕方を取り組んでいることを示している。従って、こうしたサインを持つ特定箇所の執筆者を推定することに重要な意義が浮上する。すでに上述したフォード

自身の発言や、量的・質的先行研究（イーダー、リビツキ他、パリー、ブラントリンガー）によって、本作の結末部分（17章後半から19章）はコンラッドによる執筆であると推測されてきた。先に見た通り、WANの結果においても『相続者たち』の section\_39 はコンラッド三作品（図3～図5）で一定の類似性を示しており、先行研究の主張を有意義な仕方ですべて裏付けている。一方コンラッドによる執筆箇所であるとフォードが主張（142）した箇所（『相続者たち』の section\_41 に含まれる）は、『ロード・ジム』の四つのセクション（図3の jim\_section\_3、4、5、76）と類似しているにも関わらず、「闇の奥」や『黄金の矢』ではそれぞれ一つのセクション（darkness\_section\_1 と agold\_section\_63）が挙げられているのみである（図4、5）。<sup>14</sup> この結果は、(1)『ロード・ジム』と「闇の奥」、『黄金の矢』の各作品の文体の違い、(2)一つのセクションあたりの収録語数（約1,500語）とフォードの主張するコンラッド執筆箇所（約1,000語）との語数の違い、に起因すると考えられる。いずれにせよ分類精度を保持しつつ調査対象の語数を減少させるアプローチを開発・構築していくことが今後の主要な課題となるだろう。

最後に議論の内容をまとめ、その現代的な意義を今後の量的調査の展望と関連づけて明らかにしたい。本議論は近年のポスト・クリティークの議論、とくにポスト・クリティーク的なクリティーク解釈と軌を一にするものである。<sup>15</sup> リタ・フェルスキによる *The Limits of Critique* (2015) は、カントやマルクスに由来する近代哲学的概念である「批評／クリティーク」をいかに否定するかではなく、いかに文学的に再解釈するかという視点を提案している。フェルスキは近代知識人層によって保持されてきたこの批評的思考の特徴を、空間的なメタファー (spatial metaphor) と探偵小説のメタファー (metaphor of detective fiction) の二つの側面から解釈する。つまり、優れたテキストには「深く掘り起こす」 (“digs deep into” (7)) べき謎めいた深層があり、批評家はその隠された謎を探偵 (the critic-detective (106)) のように解明しようとする、というものである。このようにしてフェルスキはクリティークという懐疑的な遺産を、批評家の抽象的な言明だけに留まらず、より広く表現やイメージへと開いて解釈することを提案している。とりわけ、西洋文明の欺瞞を見つめるコンラッドの評価は、見かけ上の意味

を疑い、表象に隠された前提やバイアス、真実の姿を暴くことを目的としてきた「批評」の伝統と深く共鳴しながら発展してきた。我々がコンラッドを懐疑的に見てきたという事実以前に、コンラッド自身もまた懐疑的な批評家の一人でもあるためである。コンラッドの作品における批判的思考をこのような形象に分解して再理解することは、彼が描き出したテキストの背後にある空間的・物語的装置を明らかにするだけでなく、コンラッド自身のクリティーク的特性と、その批評的思考を超越した視野、すなわちポスト・クリティーク的特性を補足するのに有益である。

『ロード・ジム』のマーロウが船乗りの理想像そのものであったジムの失墜に始終執着してしまう自分の姿を自己反省的に語り続けるのに対して、『相続者たち』の若い語り手は、進行中の物語の成り行きを追跡するのに忙しく、自らの内的な葛藤のサインに無自覚である。こうした未熟で、それゆえに信頼できない語り手は、これまでコンラッドが用いてきた全知の語り手や老成した一人称の語り手とも異なる仕方自己欺瞞を描きだすことを作者に強いる。駆け出しの新人作家であったフォードと金銭的な苦境にあったコンラッドとの間に生まれた『相続者たち』は、現在までに徹底した読解分析が行われてきたとは言い難い作品であり、またその実験的性質に関しても十分に探求されていない側面が多い。今回の調査と考察は、『相続者たち』に描かれた「若い語り手」の描写に注目し、少なくとも特定の重要なセクションにおける執筆者を、先行研究を補強する形で推定することができた。さらに、十分な根拠とはいえないながらもコンラッドのものと同様に推定されるセクションでは、社会欺瞞に対する主人公の強烈な懐疑的態度とその脆弱性が描かれており、これに対してポスト・クリティーク的な視点からの解釈が有益であることが示された。これは、さらなる調査研究の進展を促す考察である。

イーガンによるプログラムコードの公開により、今回の調査結果の再現だけでなく、新たなテキスト同士の著者推定調査も容易に行うことができるようになった。基礎的な分析ツールとして WAN を導入することで、これまでの読解批評になかった新たな視点を開く端緒となるだろう。今後『相続者たち』の書誌的な情報の解析が進むことで、作品同士の相互の執筆時系列との詳細な照合が可能になることが期待される。

## 注

本稿は日本コンラッド協会第6回全国大会における発表原稿に大幅な加筆を行ったものである。本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2108 の支援を受けている。

- <sup>1</sup> Burrows's Delta (2002) と呼ばれる距離尺度を、テキスト分類器として応用した著者推定法。特定の単語数ごとに調査範囲を移動させることから、ローリング方式と呼ばれる。
- <sup>2</sup> リビツキ他はフォードによる代筆が証言されている『ノストローモ』の調査も実施しているが、フォードの文体と思われる痕跡は検出されなかった(429)。
- <sup>3</sup> イーダーは同手法を13世紀のフランスの寓意詩、15世紀のポーランド語訳聖書のテキストにも適用し、実験手法そのものの精度の信頼性を確認している。
- <sup>4</sup> 例えば田畑智司 (Tabata Tomoji) によるディケンズとコリンズの共著作品の著者推定実験では、概ね章の半ばや語り手の交代など、テキストの内的特徴を区切りとした著者交代 (= 文体パターンの変化) が捉えられている。
- <sup>5</sup> 5000 語単位の調査で得られた確率と、数十語単位のテキストで得られる確率では大きな差があるため。
- <sup>6</sup> <https://www.gabrielegan.com/WAN/index.html>
- <sup>7</sup> シガーラ他はこのネットワークモデルの構造を簡略化したグラフを用いて説明している(235-8)。
- <sup>8</sup> 事前調査において、1 から 100 までの数値を 10 単位ごとに全範囲で検証した結果、数値 70 において最も高い照合精度が得られたことを報告する。
- <sup>9</sup> ここでのエントロピーは、Claude Shannon によって導入された、予測可能性の差異を測定する尺度として定義される。エントロピーの相対的な数値が低ければ低いほど乱雑さが少なく、従ってデータ間の類似性が高いと判断される (Segarra et al. 239)。本論文では、エントロピーを測定する単位として「centinats」(cns) を採用している。
- <sup>10</sup> *The Cinque Ports* や *Ford Madox Brown* (1896)、*Dante Gabriel Rossetti* (1902) は歴史的要素や人物を題材としたノンフィクション作品である。このようなジャンルの違いが文体類似度の低さに影響しているのではないかと推測される。
- <sup>11</sup> 『ロード・ジム』の section\_3、4、5、76、「闇の奥」の section\_1、5、6、15、『黄金の矢』の section\_5、14、63 に類似性が指摘されている。
- <sup>12</sup> 『相続者たち』におけるグリーンランドでは黒人が酷使されている言及があり、書き手が人種について誤った知識を持っていた、あるいは無関心であった可能性も示唆されている。またグリーンランドの描写が新聞記事の間接的な報道のみである点から、植民地のアイディアは創作段階の終盤に不完全に盛り込まれたものだという意見もある (Curreli 84-5)。

- <sup>13</sup> 7月13日付のニューヨーク・タイムズ紙のサタデーレビューに対する返信として書いたもの。
- <sup>14</sup> 図6では、フォード作『マースデン事件』と『相続者たち』の section\_39 や 41 との間には類似性がみられず、代わりに section\_40 にわずかに類似性が認められる。ここでは、この短い文章の間に作者が頻繁に交代している可能性が示されているものの、現時点での調査では十分な根拠とはいえない。
- <sup>15</sup> パーカーとウェクスラー (Jay Parker and Joyce Piell Wexler) による *Joseph Conrad and Postcritique* (2021)では、Ngũgĩ wa Thiong'o によるコンラッドの再文脈化や Yael Levin による「スローモダニズム」の実践的読解、Cannon Schmitt による表層的読解などのクリティカル・リーディングに対抗する近年の批評理論を広義の「ポスト批評」として取り込み、ポストクリティカル・パラダイムへの緩やかな移行を提唱している(5-6)。

## 参考文献

- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism: 1830–1914*. Cornell University Press, 1988.
- Conrad, Joseph. *The Collected Letters of Joseph Conrad*. Vol. 2 (1898-1902). Edited by Frederick R. Karl and Laurence Davies, Cambridge University Press, 1986.
- . *The Inheritors and The Nature of a Crime*. Edited by Jeremy Hawthorn, Cambridge University Press, 2022.
- . *Lord Jim*. Edited by J. H. Stape and Ernest W. Sullivan II. Cambridge University Press, 2022.
- Conrad, Joseph, and Ford Madox Ford. *The Nature of a Crime*. Doubleday, Page & company, 1924.
- Curreli, Mario. “Invading Other People’s Territory: ‘The Inheritors.’” *Conradiana*, vol. 37, no. 1/2, 2005, pp. 79–100.
- Dryden, Linda. “The Inheritors, H.G. Wells, and Science Fiction: The Dimensions of the Future.” *Conradiana*, vol. 49, no. 2/3, 2017, pp.103–20.
- Eder, Maciej. “Rolling stylometry,” *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 31, Issue 3, 2016, pp. 457–469.
- . “Does size matter? Authorship attribution, small samples, big problem.” *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 30, Issues 2, 2015, pp.167–182.
- Egan, Gabriel, et al. “‘I would I had that corporal soundness:’ Pervez Rizvi’s Analysis of the Word Adjacency Network Method of Authorship Attribution,” *Digital Scholarship in the Humanities*, Advance Access, 2023. pp.1–14.

- Felski, Rita. *The Limits of Critique*. University of Chicago Press, 2015.
- Ford, Ford Madox. *Joseph Conrad : A Personal Remembrance*. Little, Brown and Company. 1924.
- Hampson, Robert. *Conrad's Secrets*. Springer, 2012.
- Hawthorn, Jeremy, ed. *The Inheritors and The Nature of a Crime*. By Joseph Conrad and Ford Madox Ford. Cambridge University Press, 2022.
- Knowles, Owen and Moore, Gene M. eds. *Oxford Reader's Companion to Conrad*. Oxford University Press, 2000.
- Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Chronicle*. Cambridge University Press, 1984.
- Parker, Jay, and Joyce Piell Wexler. *Joseph Conrad and Postcritique: Politics of Hope, Politics of Fear*. Palgrave Macmillan, 2021.
- Parry, Benita. *Conrad and Imperialism: Ideological Boundaries and Visionary Frontiers*. Palgrave Macmillan UK, 1983.
- Rybicki, Jan, et al. "Collaborative authorship: Conrad, Ford and Rolling Delta." *Literary and Linguistic Computing*, vol. 29, no.3, 2014, pp.422–431.
- Segarra, Santiago, et al. "Attributing the Authorship of the 'Henry VI' Plays by Word Adjacency." *Shakespeare Quarterly*, vol. 67, no. 2, 2016, pp. 232–56.
- Seed, David. "Introduction" to *The Inheritors: An Extravagant Story*, by Joseph Conrad and Ford Madox Ford, ix–xxviii. Liverpool University Press, 1999.
- Tabata, Tomoji. "Stylometry of Dickens's Language: An Experiment with Random Forests." In *Advancing Digital Humanities: Research, Methods, Theories*, edited by Paul Longley Arthur and Katherine Bode. Palgrave Macmillan UK, 2014.

(つつい はるか 東京大学大学院 博士課程)

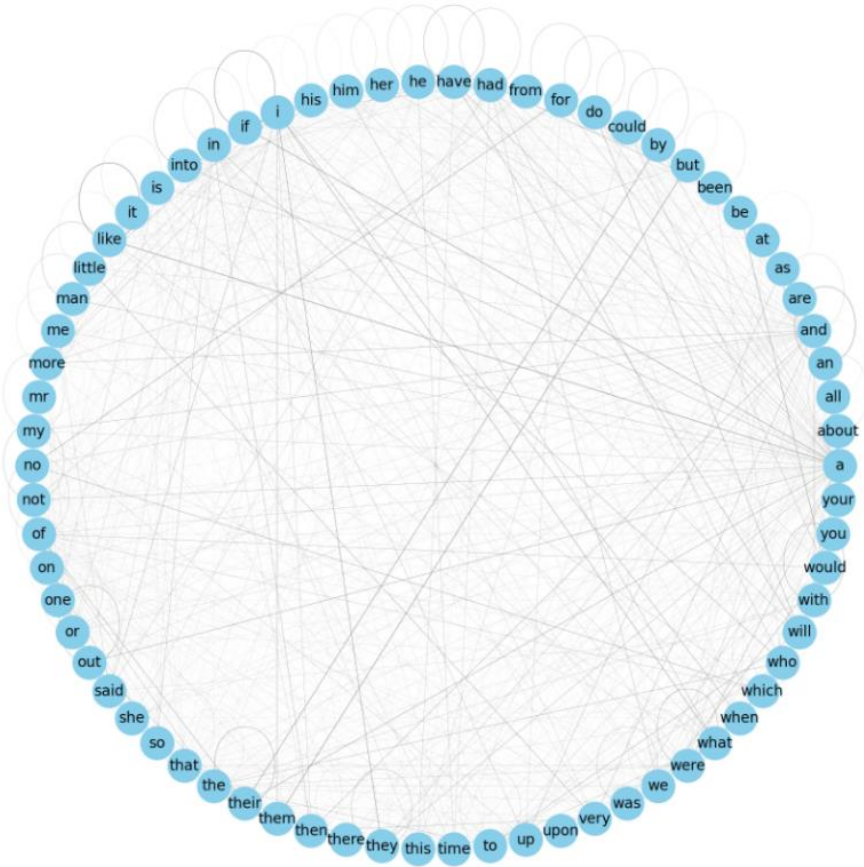


図1 『相続者たち』の section\_1 のプロフィールデータをネットワーク図で可視化したもの（円の周囲の70語がそれぞれテキストの中でどのような分布で配置されているかを示す）



単語隣接ネットワークによる『相続者たち』の著者推定

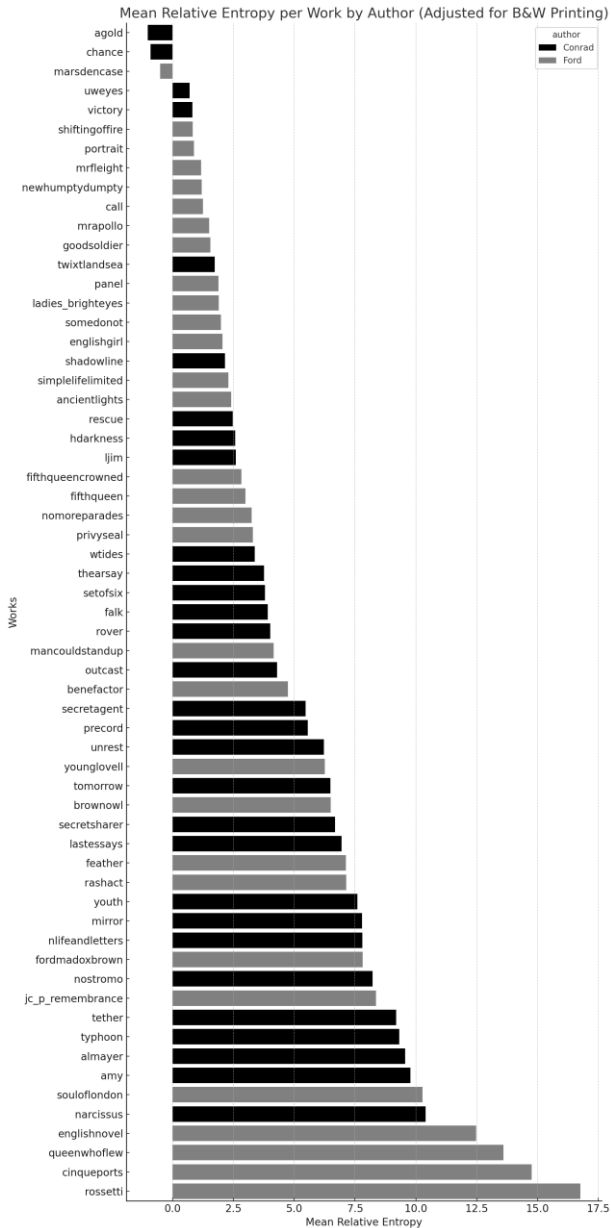


図2 コンラッドとフォードによる合計62作品と『相続者たち』のプロフィールデータを照合し、相対的エントロピーの値が低いものから下降順に並べたもの

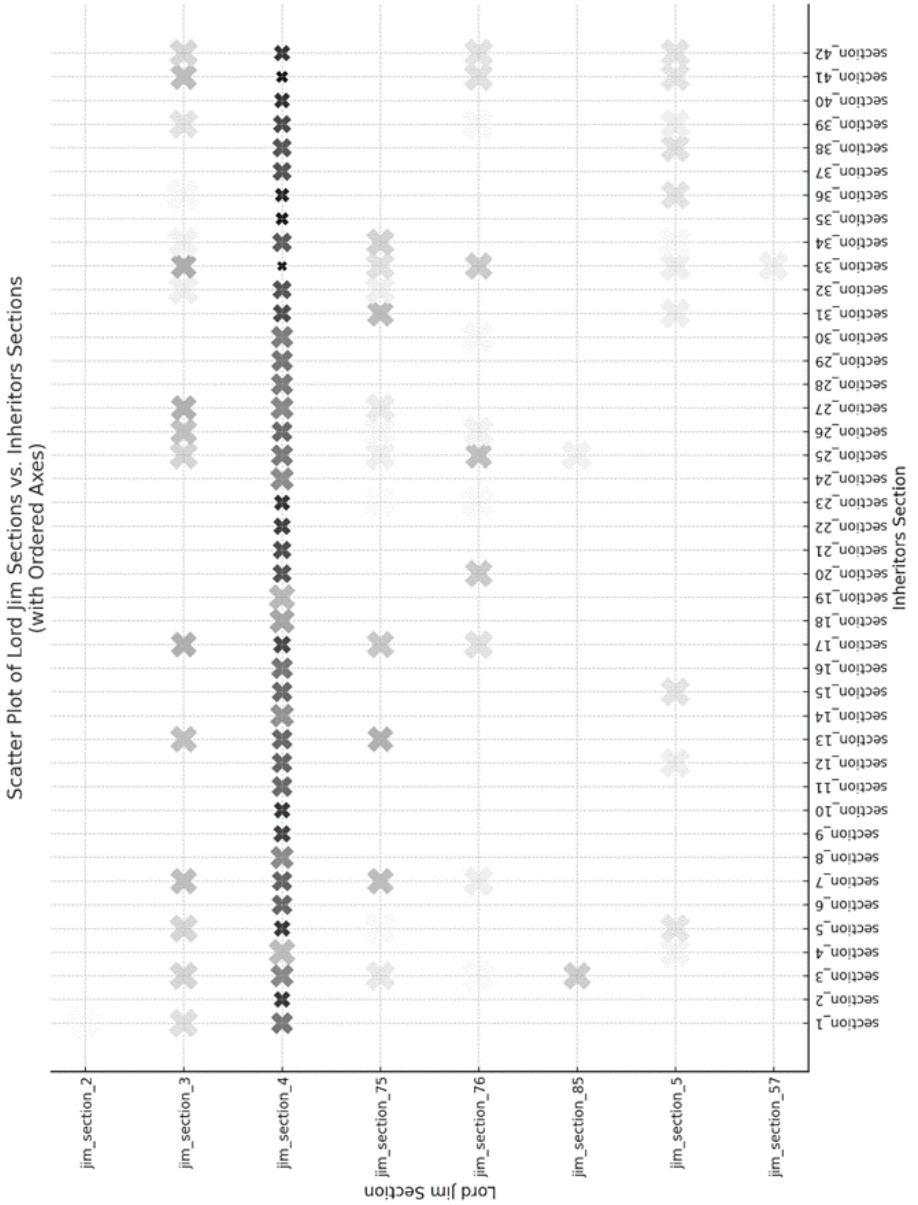


図3 『相続者たち』全42セクションと『ロード・ジム』全88セクションのプロファイル同士を照合し、相対的エントロピーの値が低いデータ上位100セクションを表示した散布図

単語隣接ネットワークによる『相続者たち』の著者推定

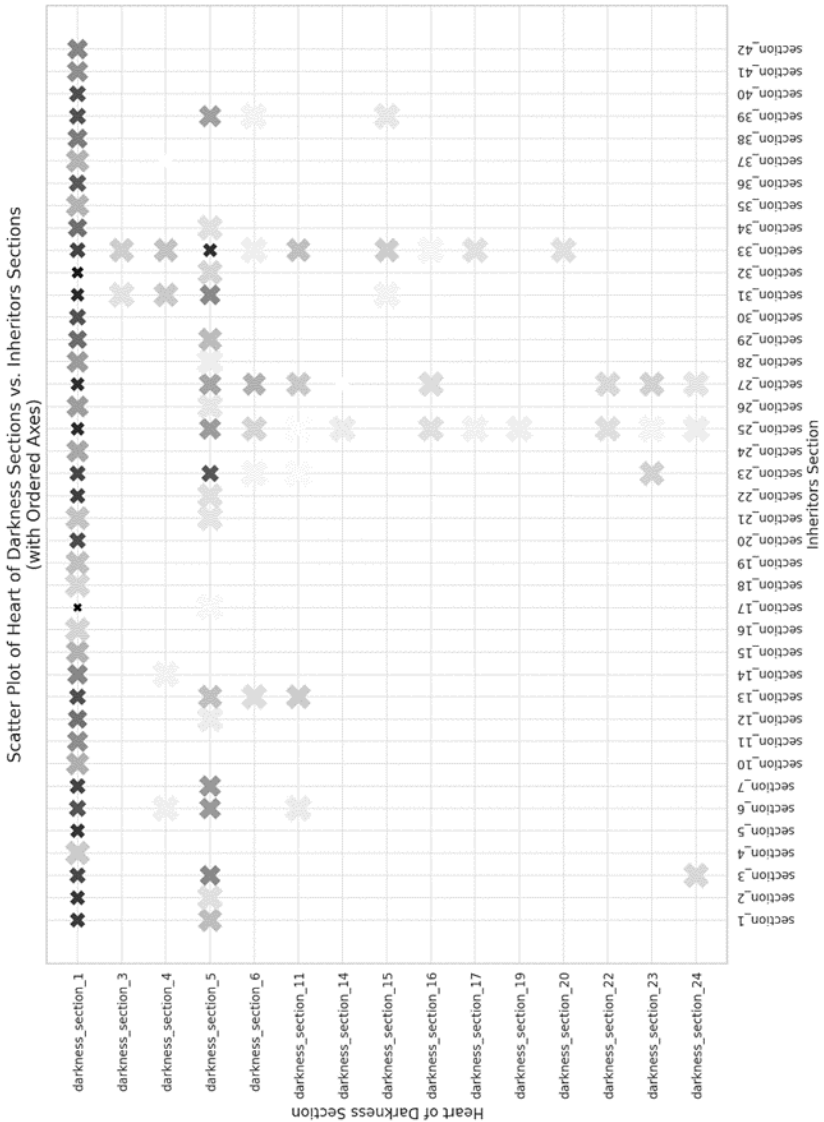


図4 『相続者たち』全42セクションと「闇の奥」全25セクションのプロフィール同士を照合し、相対的エントロピーの値が低いデータ上位100セクションを表示した散布図

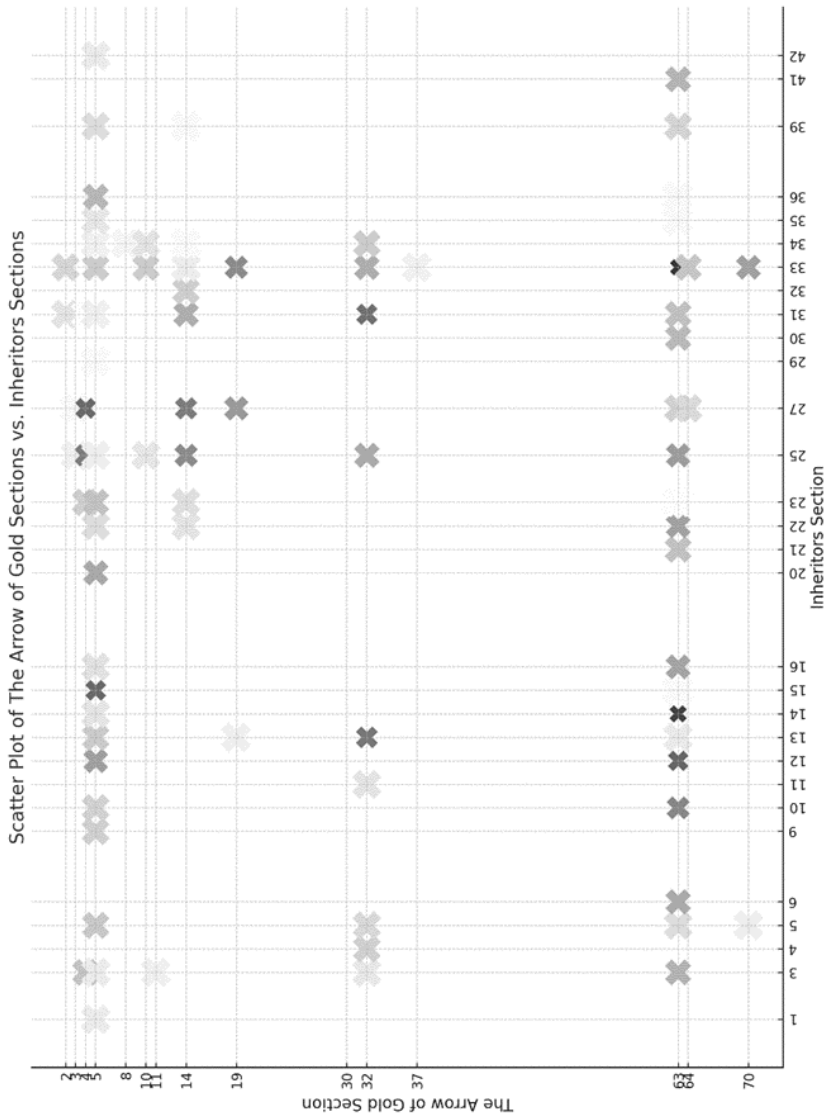


図5 『相続者たち』全42セクションと『黄金の矢』全72セクションのプロフィール同士を照合し、相対的エントロピーの値が低いデータ上位100セクションを表示した散布図

単語隣接ネットワークによる『相続者たち』の著者推定

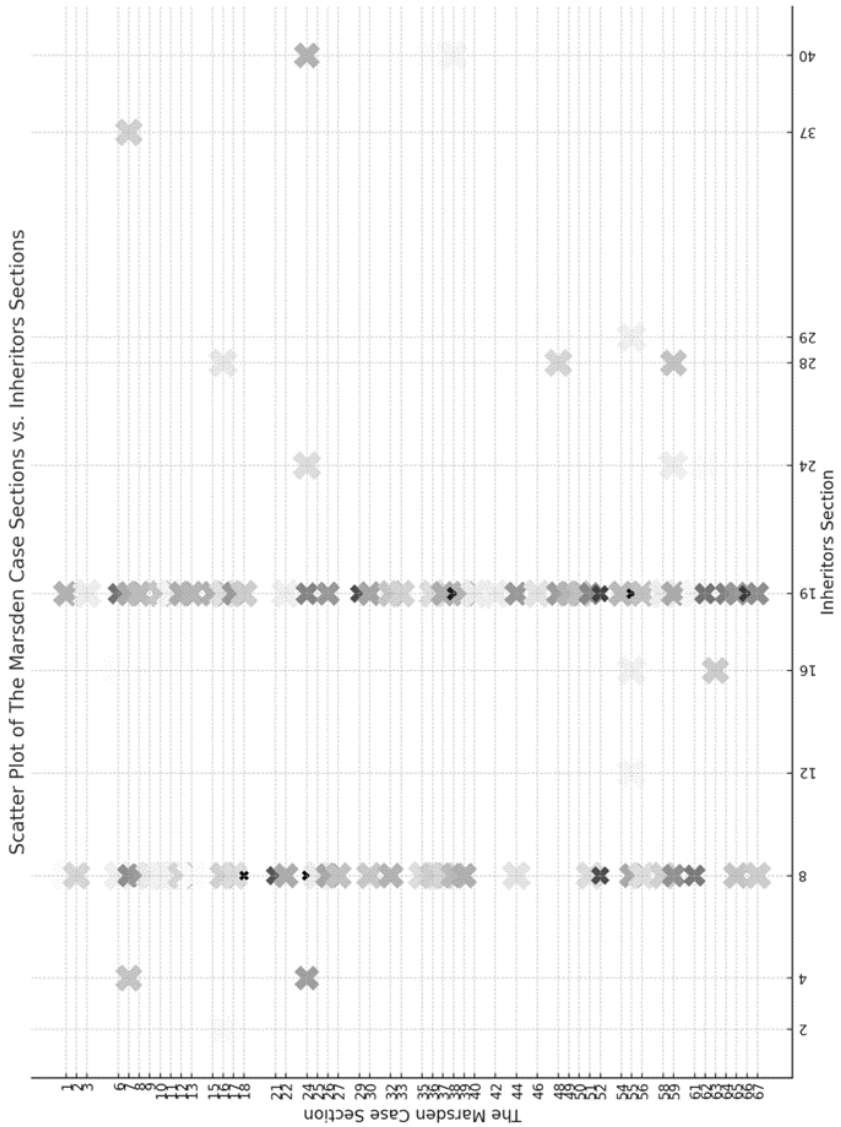


図 6 『相続者たち』全 42 セクションと 『マースデン事件』全 69 セクションのプロフィール同士を照合し、相対的エントロピーの値が低いデータ上位 100 セクションを表示した散布図

付録 1

使用したコンラッド作品 (29 作)

Almayer's Folly 1895  
 An Outcast of the Islands 1896  
 The Nigger of the Narcissus 1897  
 Tales of Unrest 1898  
 Heart of Darkness 1899  
 Lord Jim 1900  
 Youth 1902  
 End of the Tether 1902  
 Typhoon 1903  
 Amy Foster 1903  
 Falk 1903  
 To-morrow 1903  
 Nostromo 1904  
 The Mirror of the Sea 1906  
 The Secret Agent 1907  
 A Set of Six 1908  
 Under Western Eyes 1910  
 A Personal Record 1912  
 Twixt Land and Sea 1912  
 Chance 1914  
 Within the Tides 1915  
 Victory 1915  
 The Shadow-Line 1917  
 The Arrow of Gold 1919  
 The Rescue 1920  
 The Rover 1923  
 The Suspense 1925  
 Tales of Hearsay 1925  
 Notes on Life and Letters 1921

使用したフォード作品 (33 作)

Brown Owl 1892  
 The Feather 1892  
 The Shifting of the Fire 1892  
 Queen who Flew 1894  
 Ford Madox Brown 1896  
 The Cinque Ports 1900  
 Dante Gabriel Rossetti 1902  
 The Soul of London 1905  
 The Benefactor 1905  
 The Fifth Queen 1906  
 Privy Seal 1907  
 An English Girl 1907  
 The Fifth Queen Crowned 1908  
 Mr. Apollo 1908  
 The 'Half Moon' 1909  
 A Call 1910  
 The Portrait 1910  
 The Simple Life Limited 1911  
 Ancient Lights 1911  
 Ladies Whose Bright Eyes 1911  
 The Panel 1912  
 The New Humpty-Dumpty 1912  
 Mr. Fleight 1913  
 The Young Lovell 1913  
 The Good Soldier 1915  
 The Marsden Case 1923  
 Some Do Not . . . 1924  
 Joseph Conrad: A Personal  
 Remembrance 1924  
 No More Parades 1925  
 A Man Could Stand Up 1926  
 Last Post 1928  
 The English Novel 1929  
 The Rash Act 1933

付録 2

the	is	up
of	have	man
and	be	mr
to	said	could
a	all	which
he	this	like
in	from	then
that	by	who
i	they	their
was	there	into
his	my	them
it	would	when
had	an	we
you	me	are
with	if	your
for	so	more
she	one	do
her	been	time
as	were	little
at	no	will
on	what	about
not	out	upon
but	very	
him	or	